HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	The Reality of Money, Banking, and Societal Production : Lessons from Ludwig von Mises and Frank William Taussig [an abstract of dissertation and a summary of dissertation review]
Author(s)	王, 科淞
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(経済学)
Dissertation Number	甲第15879号
Issue Date	2024-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/92364
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Wang_Kesong_review.pdf, 審査の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

様式９

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（経済学）　　氏名：王　カソン

審査委員	主査　准教授	斉藤　尚
	副査　准教授	吉野　裕介（関西大学）
	副査　教授	橋本　努

学位論文題名

The Reality of Money, Banking, and Societal Production: Lessons from Ludwig von Mises and Frank William Taussig

（貨幣、銀行、社会的生産の現実： ルートヴィヒ・フォン・ミーゼスとフランク・ウィリアム・タウシッグの教訓）

本論文は、オーストリア学派経済学の現代的課題に取り組んだ成果である。オーストリア学派の基礎をなすミーゼスのプラクシオロジーは、「経済学の究極の基礎」に関する哲学的な問いに、アプリオリズムの観点から応じた体系理論である。本論文はこのミーゼスのアプローチを引き受けつつ、新たな知見を加えている。中心にあるコンセプトは、ミーゼスに固有の「因果的実在論」の考え方であり、実在に裏づけた理論という観点から、貨幣論（あるいは銀行システム論）、分業概念の本質、および資本概念の本質を検討している。

第一章 “A Further Clarification of Ludwig von Mises as a Currency School Free Banker”は、以下の雑誌に、査読付き論文として掲載されたものを元にしている。*Quarterly Journal of Austrian Economics*（ミーゼス研究所）Vol.25 No.1 147～178 頁、2022 年 7 月（査読付論文）.この論文はまた、同雑誌に掲載される前に、ミーゼス研究所の Kenneth Garschina 学生論文コンテスト（2021 年）で第一等賞を受賞している（https://mises.org/giving/presidents-impact-report-first-quarter-2021）。このように、学会誌に掲載されるだけでなく、学生の研究成果として、外部による高い評価を受けている。

この章では、ミーゼスのフリー・バンキング理論を批判的に検討し、あらたに「不可能性定理」と呼ばれるものが提起される。ミーゼスの立場を突き詰めると、不可能な見解になることを明らかにするものである。経済自由主義は、銀行による信用拡張の自由を認める立場なのか、という問題がある。本章はこの問題に対して、ジ

ョセフ・T・サレルノのミーゼス研究を頼りに、また、19 世紀英国における通貨学派と銀行学派の論争に照らして、ミーゼスの立場を新たに位置づける。通貨学派は金本位制を擁護するのに対して、銀行学派は銀行の信用創造の受動性（消極性）を擁護したが、現代のフリー・バンキング学派は、自由銀行制度を認めるとしても、各銀行が 100%の準備率を満たすべきかどうかという問題で対立する。ミーゼスの立場は、この論点に照らすと、完全準備型の自由銀行学派、言い換えれば「新通貨学派」（Salerno 2010）であると解釈できる。本章は、ミーゼスのフリー・バンキング論において、銀行学派のいう還流法則がどのように位置づけられるかを検討する。フリー・バンキングにおいて、この法則が、銀行の供給能力に対する強力な制限として機能するための条件を明らかにしている。

第二章は、スミス『国富論』における「分業」の概念が、オーストリア学派の経済学の伝統とともにどのように発展してきたかについて、体系的な叙述を試みている。議論の素材として、オーストリア学派の創始者であるカール・メンガー、アメリカの経済学者であるがオーストリア学派の伝統を様々に継承したフランク・ウィリアム・タウシッグ（とくにベーム=バヴェルクの理論を継承）、および、オーストリアの経済学者ルートヴィヒ・フォン・ミーゼスが取り上げられる。本章は、とりわけ、タウシッグの理論的貢献が、スミスからミーゼスに至る分業概念の進化の歴史に欠けていたパズルのピースとして位置づけられることを明らかにしている。またタウシッグの分業概念と、ミーゼスの社会的合理主義（市場による調整）の関係を明らかにした点に、独自の貢献がある。

第三章は、J. クラークとベーム＝バヴェルクの間で行われた「資本」論争を、新たな視点で検討している。この論争の核心は、資本概念の把握の仕方にある。論争において共有されたのは、常識的な資本概念（生産手段と利子の源泉）が、資本に関する二つの異なる問題（一つは生産の領域にあり、もう一つは流通または交換の領域にある）の科学的研究には適さないことであった。最近のアヴィ・コーエンの体系的な研究（Cohen 2008）は、この論争が、現実の歴史的時間と、一般均衡理論における歴史的時間の排除のあいだの理論的な違いに起因していることを明らかにした。本章はこのコーエンの結論に依拠しつつ、さらに掘り下げて、議論の核心は、経済科学の認識論的基盤に関するもっと深いところにあると主張する。経済学の概念化と理論化には、2 種類の抽象がある。リアリズムの精神に沿ったものと、そうでないものである。とりわけ本書は、この論争におけるタウシッグの貢献を検討している。タウシッグはベーム＝バヴェルクの側に立って、資本に関するクラークの結論を退けたことが明らかにされる。

以上の三つの章からなる本論文は、オートリア学派経済学の理論と哲学がもつ意義を十分に理解した上で、フリー・バンキング論、分業論、資本論の各分野において、新たな知見をもたらしている。本学における研究成果として、高く評価することができる。